

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開実用新案公報 (U)

(11)実用新案出願公開番号

実開平6-5631

(43)公開日 平成6年(1994)1月25日

(51)Int.Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

A 6 1 J 1/05

B 6 5 D 47/18

8208-3E

A 6 1 J 1/ 00

3 1 3 C

審査請求 未請求 請求項の数1(全 2 頁)

(21)出願番号 実願平4-25597

(22)出願日 平成4年(1992)4月21日

(71)出願人 000002956

田辺製薬株式会社

大阪府大阪市中央区道修町3丁目2番10号

(72)考案者 木口 卓也

兵庫県尼崎市南塚口町3丁目9番1号 三

喜ハイツ302号

(72)考案者 中本 甫美

大阪府大阪市阿倍野区阪南町2丁目3番24

号

(72)考案者 山下 忠志

大阪府豊能郡豊能町希望ヶ丘5丁目20番21

号

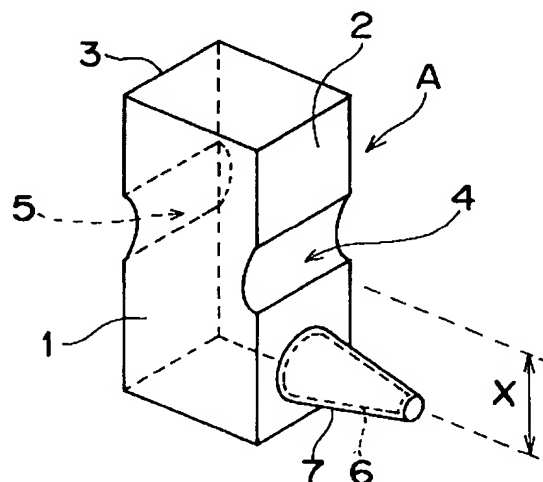
(74)代理人 弁理士 青山 葆 (外1名)

(54)【考案の名称】 目薬容器

(57)【要約】

【目的】 誰にでも容易に点眼することのできる目薬容器を提供すること。

【構成】 親指を表面(2)に、他の指を裏面(3)に当てて把持する容器本体(1)の先端部に、注液ノズル(6)を前記表面側に突出させて設けた目薬容器。



1

2

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項 1】 親指を表面に、他の指を裏面に当てて把持する容器本体の先端部に、注液ノズルを前記表面側に突出するように設けたことを特徴とする目薬容器。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 本考案にかかる目薬容器の第 1 実施例を示す斜視図である。

* 【図 2】 図 1 の目薬容器の使用方法を示す図である。

【図 3】 図 1 の目薬容器の使用方法を示す図である。

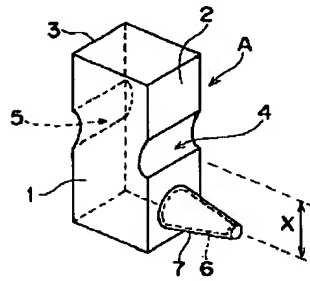
【図 4】 本考案の第 2 実施例を示す斜視図である。

【図 5】 本考案の第 3 実施例を示す斜視図である。

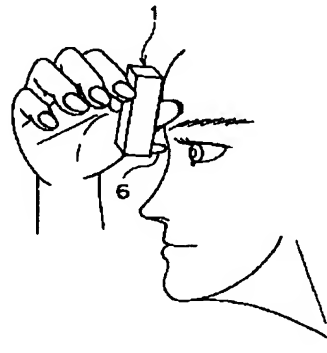
【符号の説明】

1…容器本体、2…表面、3…裏面、4、5…凹部、6…注液ノズル。

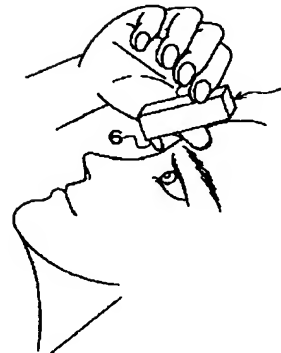
【図 1】



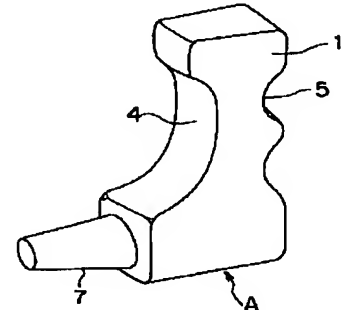
【図 2】



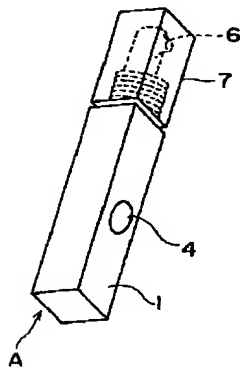
【図 3】



【図 4】



【図 5】



【考案の詳細な説明】**【0001】****【産業上の利用分野】**

本考案は、目薬容器に関するものである。

【0002】**【従来の技術と考案が解決しようとする課題】**

従来、目薬容器は、基本的に、親指と他の指とで把持する容器本体の頂部に、注液ノズルを真直に突出させた構成となっている。

そして、点眼にあたっては、前記注液ノズル先端を、点眼しようとする目の上方に位置させる必要があるが、目薬容器を把持した手は、頭あるいは顔から離れた不安定な状態である。

【0003】

したがって、初めて自分で点眼する、点眼に慣れていない小児、点眼に不安感を有する人や老人等手が震える人は、注液ノズルの先端を正確に点眼しようとする目の上方に位置させることができず、点眼に失敗することが多いという課題を有していた。

したがって、本考案は、点眼に際し、目薬容器を把持した手を、額等に当てて安定状態を保つようにして、前記課題を解決することのできる目薬容器を提供することを目的とする。

【0004】**【課題を解決するための手段】**

本考案は、前記目的を達成するために、親指を表面に、他の指を裏面に当てて把持する容器本体の先端部に、注液ノズルを前記表面側に突出するように設けた構成としたものである。

【0005】**【実施例】**

つぎに、本考案を実施例である図面にしたがって説明する。

図1は、本考案にかかる目薬容器Aの基本構造を示し、容器本体1と注液ノズル6およびキャップ7とからなる。前記容器本体1は角形をなし、その表面2に

親指を、裏面3に親指以外の、たとえば、人差し指を位置させる凹部あるいは突起もしくはマーク4, 5が設けてある。なお、前記凹部あるいは突起もしくはマーク4, 5は前記表面2と裏面3とに限らず、容器本体1を取り巻いて連続していてもよい。

そして、容器本体1の下端部には、表面2と直角に突出する注液ノズル6が設けてある。

【0006】

前記構成からなる目薬容器Aを使用して点眼するには、キャップ7を外して前記注液ノズル6が下方になるようにして、前記凹部4, 5にそれぞれ親指と人差し指を宛てがい、顔を正面に向けたまま、図2に示すように、注液ノズル6の先端を点眼しようとする目の正面に位置させるとともに、親指の爪を眉毛に当てる。ついで、図3に示すように、そのまま頭を後方に傾けて容器本体1を親指と人差し指とで押圧して点眼を行なう。

【0007】

このように、本考案の目薬容器によれば、容器本体1を把持した手を眉毛、額等に当てて支持できるため、不慣れ、不安感あるいは手の震える人であっても、注液ノズル6を安定して目の上方に固定でき、正確に点眼することができる。

【0008】

また、点眼方法は前述のものに限らず、要は、親指を額等に当てて点眼すればよい。

なお、眉毛の中央と目の中心までの平均的な距離は、成人にあつては約2 cm、子供にあつては約1.5 cmであるので、前記表面2側に設ける凹部4の中心と注液ノズル6の中心までの距離Xを2 cmあるいは1.5 cmとすれば、親指の当てる位置を常に眉毛に特定できて点眼を誰でも容易に行なうことができる。

また、目薬容器Aの形状も図1のものに限らず、図4, 図5に示すもの、あるいは円筒形等その形状はどのようなものでもよい。

【0009】

【考案の効果】

以上の説明で明らかなように、本考案の目薬容器は、親指を表面に、他の指を

裏面に当てて把持する容器本体の先端部に、注液ノズルを前記表面側に突出するように設けた構成となっているため、親指を顔、額等に当接して注液ノズルの位置を固定することができるため、どのような人でもあっても正確に点眼することができる。